

「敵わない」と思ったことが2度ある。

大人になって化粧をするようになって、「色白は七難隠す」とされる日本人の固定観念に影響された私は、ファウンデーションの色を少しでも白い色を選ぼうとした。首の色と合わないとおかしく、浮いて見えるのに。けれど、本当に色白の彼女に会った時、自分が抗っていたのが無用な努力であるように思えた。圧倒的な白さの前に、ひれ伏した。白さを手に入れるのをやめようと思った。自分の肌色で生きていこうと思った。知り合った台湾出身の女性は、私の肌色を陶器のようだと言ってくれた。肌の色ではなく、肌の質を高めていこうと思った。

大学院で、親子ほど年が違うストレートマスター(学部からすぐに修士課程に入ってきた学生を私たちはこう呼んだ)の彼と、講義やゼミで切磋琢磨した。彼は率先してレジユメの当番を引き受け、そして彼が作るレジユメの完成度は高かった。論文を読みこなし、その上で図を用いてわかりやすく提示して見せる、その理解力と表現力に嫉妬した。公共経営を学ぶのであれば、「NPM(New Public Management)」の議論は避けて通れないと思ってはいたが、25頁もあるOECDの英語の論文を読みこなす自信がなかった時も、彼が科目を取るというので私も頑張って取った。働きながら大学院に通っていたので、睡眠時間を削って夜2時起きにして毎日5時間ずつ3週間位頑張った。ただひたすら電子辞書で直訳して作った私のレジユメは、ただ単なる直訳の羅列にしかならなかったのに、彼のレジユメは日本語の論文の時と変わらない、図を用いたわかりやすいレジユメだった。修士課程を終えた時に作られたランキングに「最強の論客」というものがあった時、彼は当然に1位だった。私は同順位2人いる3位でしかなかった。そのコメントに「カミソリ後藤田」という存在に彼になってもらいたいと書かれており、私も心からそう思った。いつの日か彼がその論客の才を活かして日本を救ってくれないかと思った。「天賦の才能」を「gift」と呼ぶが、ドイツ語では「毒」の意になっているとのこと。彼が、腐りきった政権の毒になってくれないかと思う。

吉本ばなな氏が、「人がみんな自分を生きていけばどんな世界になるのだろう」と言っているが、人が、自分のあるがままに、天賦の才能でそれぞれが生きていけば、辿り着ける世界があるのではないかと思われてならない。AIの進展と人々の理解により、障害を持っていても国会議員もできるし会社経営もできる時代が来ているのだから。